



デザインの理論と実践

高橋志保彦*

The Theory and the Practice of Design

Shiohiko TAKAHASHI*

1. はじめに

私はこれまで、本学では教育・研究の場において、また社会では建築家として建築と都市デザインの分野で「理論と実践」を進めてきた。デザインにおいては「理論と実践」を、いかに切り離すことが出来ない関係にあるか、また、定年退職を機にいくらか過去を振り返ってみて、私の仕事を含め、随想として述べさせて頂く。

2. デザイン

「デザイン」には計画と意匠を併せ持つ意味がある。純粋芸術としての絵画はデザインではなくアートである。生産技術に関して計画を立て意匠を行うのがデザインである。産業革命以来、機械が大量に物を生産するには、人々は何を求め、それがどう用いられるか、生産と消費を、また流通をも考慮して製品が生み出される。そこに「用と美」すなわち機能や形態と、材料、技術、それにコストをも含めた総合的な判断が求められる。今日では、数多くのデザインの領域や呼称が生まれており、それらはグラフィックデザイン、ファニチュアデザイン、プロダクトデザイン、テキスタイルデザイン、ランドスケープデザイン、インダストリアルデザイン、照明デザイン、インテリアデザイン、建築デザイン、都市デザイン等々である。日常生活はデザインに包まれており、身の回りには、本のデザイン、本箱のデザイン、椅子のデザイン、机のデザイン、パソコンのデザイン等々、ありとあらゆる生産品はデザインによってつくり出される。

現代ではデザインの中にアート性の強いものもあ

やされるし、アートとデザインの境も曖昧になっている。それに、もはやモノだけではなく、キャリアデザインとか、ライフサイクルデザインという行為や行動計画等、美意識をもって計画することにもデザインという語彙が用いられる。若い女性がよく言葉に発する「カワイイ！」もある種の美と心地よさの価値判断を示している。市民の中にこれほどデザイン意識が浸透してくれば、デザインの質 quality が求められる。その価値の判断力を高めるとすれば、デザインのグレードを見定められる能力が必要とされる。そう考えると、大学の教育にもデザインに重きを置いた授業科目が多くあってよいし、デザイン学部があってよい。ハーバード大学にはデザイン学部大学院があり、都市計画、都市デザイン、建築、ランドスケープデザインのコースがある。私見だが、本学において、建築学部ないしはデザイン学部が新設され、建築、都市環境デザイン、都市・地域計画、インテリアデザイン、グラフィックデザイン、プロダクトデザイン、テキスタイルデザイン等の学科を擁するとすれば、時代の先端を行くことになり、多くの入学希望者が望めるに違いない。

3. デザインの理論と実践

建築と都市デザインに関して述べると、デザインは理論だけでは出来ない。絵が上手だからといって質の高い建築を創れるとは限らない。計画と意匠は車の両輪である。右脳で感性、左脳で理論を交互に往復してデザインを磨きだす。それに各人の嗜好と経験が加わり短い振幅の中に短時間に、能力によっては瞬時にその価値や良さが読み取れる。実践は当然理論的組み立てが必要であり、モノを造ってみてその理論を実証する。それで良かったか、悪かったかを自分で確かめる。満足できないときは

*名誉教授

Professor Emeritus

次にはどうするかを考える。良いものが蓄積されてデザイナーの個性やアイデンティティが形成されていくことが多い。天賦の感性と、修練による蓄積によって、優れたデザイン能力が備わる。

以前、世界的に有名な建築家M氏が審査委員長を務める都市デザインの国際コンペ審査委員をしたときの話だが、M氏いわく「コンペは非情だね、何ヶ月も頑張って提出された作品も30秒で良し悪しが分かってしまう」。確かに、不思議なほどに一目してその作品のグレードはおおよそ見当がついてしまう。

デザイン能力を養うには書籍や文献を読むことと優れた建築を見ることである。学生には物事に接したとき、常に「なぜ・なるほど・それならば」を実行するよう繰り返して述べてきた。即ち「疑問→理解・合点→創造」である。そして、常にメモ帳をしのばせ、すぐメモる習慣をつけることを望んだ。建築学会主催のコンペにおける審査委員会で、いまや世界的に活躍する建築家A氏と審査を行ったとき、A氏はポケットから小さなメモ帳を取り出し、机の上に並べられた提出作品の良いところや自分に参考になるアイデアをメモっていた。「一流の建築家にしてここまでやるか」と感じ入ったことがある。

大学での授業では、デザインの理論と実践の話や、各種委員会に委員として出席して得たup to dateの最新情報を受講生に話してきた。学生も「理論と共に実際にはこういうところがキーポイントになる。社会システムにもこういう問題がある。クライアントと設計と施工の間にはこのような問題点が常に内在する。設計における諸々の諸問題がこれほど沢山あり、建築家の情熱と努力が必要だが、誠意を持って積極的にコトに当たればこのように解決する。」という話を目を輝かせる。

学生にとって、「建築が面白く、やりがいがあり、苦しみの中にも楽しさがある。」とモチベーションが高まるよう授業を行ってきた。何事もそうであるが、やる気になれば自己研鑽に弾みがつき、いつか花開く。

学外でも国土交通省の外郭である全国建設研修センターや道路環境研究所で毎年のように、「都市デザインの理論と実践」という講義を、国土交通省関連や地方自治体の若手技師や設計事務所にに向けて続けてきた。受講者に問題提起をして、共にわが国の美しい環境整備に尽力してもらいたく喜んで講義に参加してきた。

4. 私の仕事・・・建築と都市デザイン／街づくり

もとより私は建築家・都市デザイナーであり、建築作品では、今はない後楽園球場ジャンボスタンド、後楽園遊園地、横浜の金沢ハイテクセンター公共棟、大和駅ビ

ル、代々木公園野外音楽堂、カルビー清原工場R&DDEセンター、プレス/fitness や数多くの住宅の設計。都市デザインでは、わが国のいくつかの都市の街づくりに参画し、作品をつくってきた。具体的には、各都市の調査・分析と基本計画や中心市街地の活性化策の立案、緑豊かな中心商店街のモール整備、広場や公園の設計である。

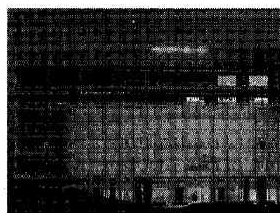
主たる作品例をあげると、北海道は北見(駅南口広場)、旭川(しあわせ銀座)、東北は、仙台(一番町モール)、関東は、つくば研究学園都市(中心市街地ストリートファニチュア)、千葉ニュータウン(タウンセンター・駅前広場)、多摩ニュータウン(唐木田地区整備、唐木田ガーデンロード)、千葉(千葉銀座、中央銀座)、柏(柏駅前通り)、東金(東口駅前通り)、東京(銀座西並木通り、銀座花椿通り、代々木公園野外音楽堂及び広場、武蔵境駅周辺整備、千歳烏山駅周辺整備、三軒茶屋商店街整備、東深沢エーダンモール、武蔵小山パルク、武蔵小金井中央銀座)、横浜(馬車道ガーデンストリート、吉田橋及び馬車道広場、開港広場、山下公園通り、山下公園整備基本計画及び海岸柵、本町通り、横浜国際競技場周辺整備、川辺公園及び帷子川プロムナード、菊名ウエストモール、天王町シルクロード)横須賀(中心市街地整備、京急久里浜駅前通り、どぶ板通り)逗子(逗子駅前広場)、藤沢(辻堂駅周辺商店街プロムナード整備)、平塚(中心市街地整備・紅谷パールロード・東海道本通り)、甲信越は甲府(中心市街地整備・春日モール・ペルメ桜町)、北陸は富山(富山ブルーパール、多目的広場、平和通り整備)、関西は神戸(サンセットモール/ポートアイランド)中国では南京(建業区倉巷街ショッピングセンター基本設計)等である。

街づくりは昭和51年(1976)完成の「馬車道計画」が最初であったが、既存の道路を豊かな歩行者空間にするわが国最初の試みであったため、警察から「ベンチを置くのは道交法違反。歩道にタイルを貼ると学生が剥がして投げつける」と大変叱られた。それにもめげず知恵を絞ってその後のモール事業のモデルを創り上げた。海外での国際会議にも何度か招待されて発表し、建物の壁面後退の技法を含む日本のモール整備事業が賞賛された。

街づくりは大変根気のいる仕事で、多くの住民や商業者の意見を聞き、ワークショップを行い、行政との打合せ、警察や消防とのディベートもある。商店街では多種多様な商業者がいるので、時には利害の衝突 conflict of interests がある。行政においても関係局がいくつか絡むことが多い。都市デザインが「関係のデザイン」といわれる所以はここにある。商店街の仕事にはコンセンサスを形成することが最も大切だが、計画の当初は「賛成



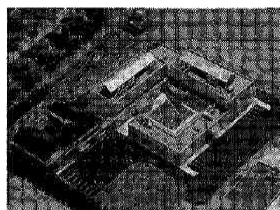
代々木公園野外音楽堂



横浜金沢ハイテクセンター



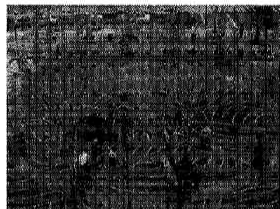
鶴沼の家 (自邸)



カルビー清原工場実験研究棟



馬車道ガーデンストリート



開港広場



山下公園通り



川辺公園・帷子川プロムナード



仙台一番町モール



平塚紅谷パールロード

3：中間6：反対1」のケースが殆どである。意見をまとめる大事なポイントは、「反対者の意見に耳を傾け、尊重する」ということである。非常な努力と忍耐が必要だが、これをしないと後々までギクシャクする。反対者の意見にはかなりの正論が含まれるケースが多い。それを理解し、共に受容と修正を重ね、反対から賛成に回ってもらう。それにはこちらが「公正、平等、寛容の精神」をもって情熱を傾けなければならない。

何事もそうであるが街づくりには熱意と創意が求められる。専門的には、都市計画・建築・シヴィックデザイン・ランドスケープデザイン・プロダクトデザインの総合的知識と設計能力が要求される。その上にアインシュタインが言うように「知識より構想力」が必要とされる。

ダンテは「神は田園をつくり、人は都市をつくる」と言った。私は「人は都市をつくり、都市は人をつくる」

と考える。都市のアメニティ形成はユニバーサルデザイン、エコロジカルデザインを伴い、人間形成にとって大切な都市環境デザインである。幼児にはそれが原風景になり、心象風景になる。それは理屈を越えるものである。

5. 社会活動

先に述べた審査委員会の他、思い出に残る審査委員会として、3～5年前BELCA（ベルカ）賞（建築・設備維持保全協会）やBCS賞（建築業協会）の審査員を任命された。BELCA賞には、築後30年以上大切に利用されメンテナンスの良好な建築に「ロングライフ賞」を、リノベーションが行われ姿を変えてもサステナブルに生き生きとしている建築に「ベストリフォーム賞」を与えるという、環境重視の現代においては大変意義ある賞である。

BCS賞は、デザインが秀逸で、設計と施工の技術に優れ、学術的・社会的に意義があり建築界の歴史に名を留めるような建築を表彰する名誉ある賞である。書類審査とスライドでの審査。のち手分けして全国の応募作品を現地審査する際、著名な建築家等からも説明を受ける。毎年80～100の応募の中から15～16作品を選定するという、審査員の見識も問われる大変責任ある審査である。

丁度その頃、東京駅前丸の内新丸ビル隣に、大正8年建築の経済同友会やその他が入る日本工業倶楽部という歴史的建造物があり、保全活用の委員会に都市計画学会から任命された。放っておくと消滅する大正期の建築を保存すべく、学会、建築家協会等で署名運動が展開されていた。私を含む5名の委員と関係者で幾度となく話し合いをもち、事業者の理解を得て保全することが出来た。低層部に旧館を残しその上に超高層を建てるというやり方で決着。すでに完成をして学会賞を受けている。

3年ほど前には、文部科学省や会計検査院の入る「中央合同庁舎7号館のPFI事業」の審査委員を国土交通省から任命され、建設部門審査は早大、東大の先生方と共に4名、及び経営部門審査は一橋大、鳥取大、不動産関係の4名計8名で、2年間大変重要かつハードな審査をするという貴重な体験をした。旧文科省の建物を一部保存し、霞ヶ関ビルと同じほどのボリュームをもつ2棟の超高層ビルが、まもなく虎ノ門に出現する。

これらの審査員を務めると、現代の最先端の設計、施工の内容や傾向が分かり、審査員自身も学ぶことが多い。

ユニークなボランティア活動としては、「日本トイレ協会副会長」の役目がある。もはや22年活動し、日本はトイレの先進国となった。公共トイレ、学校のトイレ、山・観光地のトイレ、ユニバーサルトイレ、次世代トイレについての活動である。我国のトイレ協会に刺激され、

各国でトイレ協会が発足している。文化的領域を超えてトイレ問題を考えようと、世界トイレフォーラムも世界各地で何回か開催された。今世界では24億人の人達が満足なトイレにアクセスできない。限りある水資源を考えると、水洗トイレが金科玉条の文明施設とも考えにくい。脱水洗トイレも含め、エコロジカルサンテーション等の次世代トイレを水問題と共に考えることは、福祉社会のトイレと共に人類共通の課題である。

9月には英国の研究者が、日本トイレ協会の活動や私のトイレ作品を取材するというし、来年秋にはアメリカでトイレの講演を今から依頼されている。英語でトイレの濫蓄を語る講演をどう展開させるかこれから準備する。

また、景観問題に関しては、昨年発効した新しい法律「景観法」の関連もあり、藤沢市の都市景観審議会会長として、住民主体の望ましい景観形成についての審議や、景観条例の制定に向け微力を尽くしている。

6. 国際交流とアジア5大学学術シンポジウム

国際交流の重要性はいまさら述べることもない。

去る7月5・6日に建築・都市分野で、「最近の都市の状況と都市デザイン」と題するアジア5大学学術セミナーを本学で行った。併せて、現在国際的な重要課題である「建築教育の問題」を論じ合った。東アジアにある本学の国際交流協定校（成均館大学校／韓国、同済大学、武漢理工大学／中国、国立台湾科技大学／台湾）と本学の5大学で、実行委員会の尽力があってスムーズに実現した。3年前からその計画を立て、各大学を回り準備してきた私にとってその成功に肩の荷を降ろした。

昨年は成均館大学校との学術シンポジウムで神奈川大学から教員4名と学生24名が先方を訪れ、その先鞭をつけた。特に学生間の交流は有効であり、学生の建築デザインのモチベーションが向上した。今年は成均館大学校との学術交流を進展させ、アジア5大学のセミナーとし、大変有意義であった。学生も成均館大学校から7名、武漢理工大学から3名、台湾科技大学から4名、合計14名が参加した。各大学の卒業設計作品をWEB上で展示、また本学ではパネル展示を16号館で行った。参加した代表学生の作品のプレゼンテーションも行い、各大学の先生方のコメントも受けられるようにした。学生にとっても大きな刺激となり今後の成長に役立つものと確信する。その後学生間で、都市と建築を視察するプログラムを立て内容の濃い交流が行われた。来年は上海か武漢でセミナーやワークショップを行うことに内定した。

とりわけ学生の交流が首尾よく行われた。学生同士の交流に教員はあまり口出しをせず、自由に任せたことも

あって、学生の自主性が大いに発揮され、学生間交流の萌芽が勢いづいたのは仕掛け人としては大いなる喜びである。今後ますます本学の多様な分野で国際交流が活発に行われるよう願っている。

7. 定年退職を機に

退職後、再びアトリエでの仕事に戻った。これまでは、大学での研究・教育とアトリエでの設計活動を完全に分けて行動していた。日中は大学、夜は11時から12時までがアトリエでの設計活動。週日の夕食は常に外食。土日以外家で夕食を摂ることはなかった。いまは7時半頃には自宅に戻り家で食事を摂る。体が楽になり、犬との散歩の時間がとれるようになった。夕食後の散歩は翌日の計画や、設計のアイデアを考えるのに大変有効である。

4月以降、これまでも行っていた1年次の「建築のデザイン」の講義を非常勤講師として担当している。情報の8割は目からといわれる。デザインの講義はヴィジュアルに授業をすることが肝要である。これまで世界の都市を歩き、撮ったスライドは数万枚になる。その中から選定し、パワーポイントに編集して、左右の映像を、昔と今、都市デザインプロジェクトのbefore/after、欧米と日本、アジア諸国と日本 というように価値観の違い、人々のライフスタイル、空間やシーンを比較対照して講じ学生から好評を得ている。

ここ数年間、アジアの国を訪れることが多かった。そろそろ欧州の風を体に受け充電するために9月半ばから20日間ほど、イタリアを中心に欧州を周る計画を立てている。優れた風景を創り出す建築や風景と調和をとりながら、より優れた風景を創り出す建築はどうあるべきかを探りたい。イタリアの小さな町は、民族や町の「目」を持つ。優れたデザイン能力を持つイタリア人の民族の美意識や暮らしそのものを物語る表情豊かな「目」である。その視線と向き合って思索を深めたい。

年末には武漢理工大学へ講義に行く。書籍の寄贈をしたので高橋コーナーの開所式もあるということで楽しみにしている。周祖徳学長、曾春年外事処長、李百浩土木建築学院長を始め多くの知人に会うことも楽しみである。

8. 謝意

私は、1988年から18年間神奈川大学に奉職させて頂いた。その間、多くの教職員・関係者の方々にご厚誼を頂き、特に横浜キャンパス再開発計画や国際交流の基本方針等の改訂に関しては、多大なご理解とご協力を頂き、心から感謝いたします。また、拙文を掲載する機会を用意して下さいました編集委員の方々にも深く感謝いたします。